

【3月号バナナの国で平泳ぎ】

〈 夏季水泳教室 〉

ここマチャラでは3月と4月が夏休みです。夏休みといえば水泳のシーズン、10月から続いていたプールの工事が終わり本格的に職場での仕事が再開されました。

例年無料だった水泳教室ですが、今年は月謝制に変更しました。真夏のプールを無料で利用できることで生徒数が爆発的に増え、指導はもとより監視の目が行き届かないことが理由でした。生徒数を制限し、安全で効率的な指導を行うにはこの方法を導入するしかないと言い続けてきた甲斐がありました。月謝制にしたのは、プール設備で気になる点を改善するためです。

しかし、新しいことに取り組むときは問題がつきもので、最初の1週間は怒涛の日々でした。一番の問題は生徒数に上限があるにもかかわらず生徒数が多いことでした。月謝を支払わず泳がせている保護者がいたので。あの手この手を駆使して何とか取締りを終えましたが、それでも生徒数が名簿通りにそろわない……。一体何が起きているのか、常に一難去ってはまた一難の状態なのでした。おかげで僕も同僚も毎日笑いながら働いています。



←日曜日でしたが夜に同僚と集まり、水泳教室初日の準備をしました。

→今回は指導者という立場ではなく、運営側で参戦。準備体操で出席者を確認しながら、会場の防犯チェックをするボランティア。



〈 同期の最終報告会 〉

現職教員組なので3月に帰国する水泳隊員の1人が、任地で最終報告会を行い、それに合わせて行われた記念大会に水泳隊員全員で参加しました。

標高がある中で初めて参加する大会でした。僕は平泳ぎを泳ぎましたが、平泳ぎは一番抵抗を受けやすい泳法です。高地という利点はその弱点を埋めてくれるのでしょうか、呼吸で体を水から上げるたびに味わったことのない新鮮な感覚に驚いていました。

実はこの大会、エクアドルの子供達に模範泳法を示す目的で開催されました。酸素の心配がありましたが子供達に日本の水泳を魅せることができ、また何とか生き残ることができて試合後はホッとしました。



↑帰国の水泳隊員Iさん。一挙手一投足がお手本でした。

体育隊員として、言語を越えた指導ができることの嬉しさと、同時にスポーツというコミュニケーション手段のすばらしさを酸素不足で薄れゆく意識の中でひしひしと感じました。

〈 現職教員組の帰国 〉

先日24年度4次隊と25年度1次隊現職教員の方々が帰国されました。25年度1次隊は僕の隊次であり、駒ヶ根の訓練所時代からお世話になった方々です。振り返ればいつも学ぶことばかりでした。活動で行き詰まったときは的確なアドバイスを頂いたり、時にはお酒を交わしながら進路相談にのって頂いたり、日本から遠く離れたエクアドルで現職教員の方々は心の支えでした。特に水泳隊員の1人には、迷惑ばかりおかけしていたにも関わらず、最終報告会で「私の夢は2020年東京オリンピックで水泳の3人で働くことです」と仰っていただきました。昔も今もこれからも心強い存在です。先輩隊員がいなくなり、今では僕たちが一番の古株です。後輩隊員と自分たちが培った経験を共有しながら、お世話になった方々にはいつか恩返しができるよう、努力を続けたいと思います。



↑帰国される方々は伝えたいことがたくさん。活動のすべてが頭の中に詰まっています。